



## 馬耳東風

高度経済成長に合わせて自動車の急速な普及発達は、路面電車をいかにも邪魔で渋滞と事故の要因だとした。時には線路に車の足を取られてハンドル操作がうまくいかず電車を立ち往生させた。それではと、線路をなくしてトロリーバスが誕生した。路面の上空は電線や架線が右往左往するほどに張り巡らされ、まさに都市景観無視で所狭しと、より実務が先行した。バスへの転換が最も近道であった。交通渋滞はいかに都市社会の大問題となった。高度成長時代のまさに動く住宅は、生活必需品となり駐車場スペースをいかに作り出すかに智慧を絞った。役所や警察に交通安全担当部署が、消防に救急制度が生まれ交通安全教室は地域や学校行事として生活上必修のものとなった。地下をクモの巣のように走り抜ける地下鉄は、エスカレーターで乗車も楽になったがどこか不気味な地下の乗り物で踏切が無いのが魅力だが、外の景色を眺める楽しみが無い。

さて、街道沿いに「たてば」という用語が残る。明解古語辞典によると、「立て場 街道でかごかきなどがつえを立てて休息する所」とあり、広辞苑は「馬などの交代もした。明治以降は人力車や馬車などの発着所、または休憩所」と追加している。明治の頃、テトテとラッパを吹きながら鉄道馬車が走っていたという。古老の話で立て場が駅だったそうだ。地図で走行距離を測るとやはり馬車を引く馬の休息が必要だ。馬車の交換場所道幅も広い。本格的な鉄道やバス路線が普及するまでの手段であった。地方都市へ出掛けると路面電車に乗るのを

楽しみにしている。色鮮やかな移動看板に注目する。また、富山市では快適な次世代型路面電車（LRT）ライトクレーンが配備され、乗車するとなか得をしたようであらう。すっきりした色合いの窓の大きな床の低い二両連結車は、通勤通学だけでなく高齢者の足としての位置づけは大きい。地方都市での普及は急速に広がり、世界的な導入傾向が中心街の復活だと期待される。料金支払いもカード式で簡便化した。横浜市の長後街道と鎌倉街道の交差点を走る地下鉄に立場駅がある。かつて駕籠かきや馬方が一息入れた場所が駅名として残された？ と思うとうれしい。

アリの行列は子どもの頃から見慣れているが、加減速が整然としており渋滞しにくい。渋滞学の英単語 Jammology を生み出した西成活裕 東大教授は、過密国の問題解決に積極的だ。自動車をはじめ、レジ、トイレなど日常の渋滞は日本人なら経験済みだ。集まれば渋滞は起きやすい。本能的に草食動物や犬のように群れるものと、猫や熊のように群れを作らないのは適応的視点だそう。目が見えにくいアリはフェロモンの分泌を頼りに見事な行列をつくりながら渋滞を避け、たゆみない社会生活を続ける。混雑を避けるために電車の入り口の前に邪魔物を置く解消に役立つシミュレーションを見たが現場で実際に見かけたことはない。日本の社会は整然と訓練化された列を作る。まさに成熟社会の美学だ。ここに来て、万全を図ったはずの新交通システムの無人電車の逆走は、想定外のこととか。一刻も早く原因が明らかになることを祈るばかりだ。 (柏)